

三豊平野における渡来系遺物に関する予察

－ 縁塚 10 号墳出土切子玉の紹介 －

丸本 啓貴

1. はじめに

香川県の西端に広がる三豊平野（以下、「本地域」という。）は、県内において綾北平野とともに後・終末期の古墳が数多く築造された地域である。特に平野南部は、岡山県総社平野、広島県芦田川下流域、尾原川下流域、山口県佐波川下流域等とともに、瀬戸内地域でも屈指の巨石墳を擁する地域として数えられ、本地域の巨石墳が内包する横穴式石室⁽¹⁾は四国最大ないし最大級の規模を誇る⁽²⁾。一方、本地域は、鉄地金銀象嵌獣面大刀柄頭（出土遺跡不明）や銀製冠立飾（母神山鐘子塚古墳出土）といった希少な金工品の出土地としても知られるが、こうした副葬品はいずれも渡来系遺物として評価されている⁽³⁾。さらに、後期古墳から出土する須恵器の中にも、朝鮮半島産土器との形態的に類似するものが含まれる⁽⁴⁾。また、朝鮮半島で作られた製品の模倣品と考えられる斑点文タイプの装飾付きガラス玉⁽⁵⁾の出土事例も多い。

舶載品やその模倣品、流入経路や製作地の別を問わず、渡来系要素を有する遺物が散見されることは、傑出した規模の横穴式石室の存在とともに、本地域の特徴であるといえ、古墳群の造営主体の性格や地域間交流の実態を考える上で看過できない。筆者は、このような問題意識をもって既報告の出土品を再点検したところ、縁塚 10 号墳から出土している切子玉に、日本列島内で一般的に出土している製品には見受けられない特徴を確認した⁽⁶⁾。本稿では、この縁塚 10 号墳出土切子玉（以下、「本資料」という。）の再資料化を行い、その位置づけについて整理するとともに、渡来系遺物である可能性について予察し、本地域における渡来系遺物の流入実態について考える契機としたい。

2. 縁塚 10 号墳について

縁塚古墳群は、平野中央部に位置する母神山古墳群や大野原古墳群とは対照的に、本地域の縁辺部にあたる丘陵の先端に形成された 15 基の円墳からなり、その造営期間は 6 世紀後半と推定されている（中西 1991・1992）。古墳群の核と考えられる 4 号墳は直径 28 m の円墳で、埋葬施設である横穴式石室の玄室

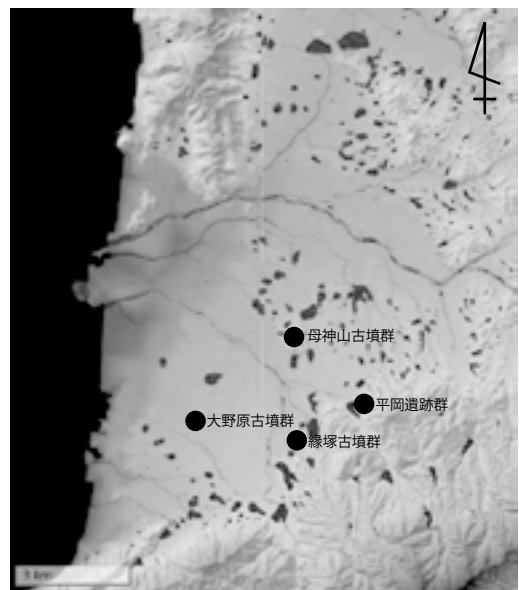


図1 三豊平野南部の主要な後・終末期古墳群
（「国土地理院デジタル標高地形図
（技術資料 D 1 - No. 979）」を加工し筆者作成）

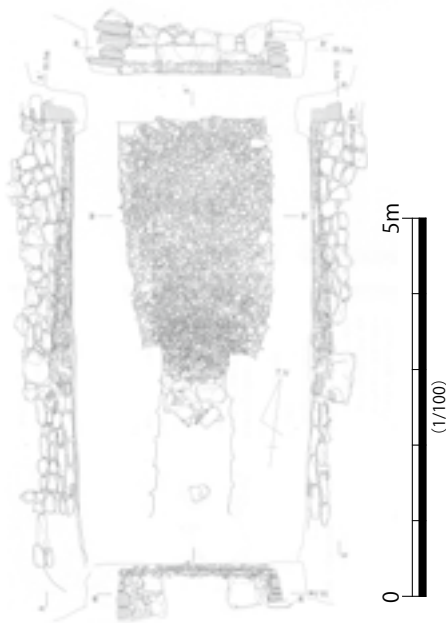


図2 縁塚10号墳横穴式石室実測図
(中西1991掲載図を一部改変し転載)

床面積は、石室石材抜取坑から約15㎡と推定される。香川県内では超大型の部類であることから、大野原古墳群に準じるような階層に属する被葬者の存在を想定でき、本地域内において比較的有力な集団の墓地であったことが推察される。

このうち、本資料が出土した10号墳は推定直径15mの円墳である。尾根の最先端に位置しており、古墳群の中では築造順がやや後出すると考えられる。埋葬施設は残存長5.3mを測る単室構造の横穴式石室で、玄門部は本地域の盟主墳のように羨道内側に石材が突出しないが、他の側壁材に比して大ぶりの石材を立柱状に積み上げる。玄室は平面プランがやや胴張の羽子板状を呈する。奥行は3.05m、幅は玄室中央部で1.9m、玄室床面積は6㎡前後を測り、讃岐地域では比較的一般的な規模といえる。石積みは、奥壁と奥壁側の側壁の基底石に長軸長0.5～0.9mのやや

大ぶりの石材を用い、2段目以上には小ぶりの川原石を持ち送り気味に積み上げることで構築するが、5段目以降は後世の開削で失われている。

玄室内の床面及び礫床間からは、本資料の他に、須恵器（蓋坏、高坏、台付長頸壺、短頸壺、甕、平底瓶、提瓶、平瓶、臚）、暗文土師器、玉類（翡翠製勾玉、ガラス小玉、琥珀製棗玉、材質不明管玉、本資料）、耳環、石製紡錘車、農工具（鉄鎌、鉄斧、鋤先）、馬具（辻金具、鋌、鉸具）、武器（鉄鏃、刀子）等が出土している。盗掘を受けている形跡は認められず（中西1991）、他の構成墳に比して玄室内の副葬品の遺存状態は良好であったといえよう。

3. 本資料の報告

(1) 色調、形態及び法量

半透明の12面体で、色調は「きみのブラウン」⁽⁷⁾色を呈する。法量は再計測値で体高10mm、最大幅は体部中央で10mm、両端面で6～7mmを測り、稜は水晶製切子玉のようなシャープなものではなく、やや丸みを帯びるもので、全体的にややずんぐりとした樽状を呈する（写真1）。重量は1.32gを測る。

(2) 紐通し孔

端面B（写真3）の中央部に直径1mmの紐通し孔が完存し、孔周囲には穿孔時のものと思われる剥離痕がある。端面A（写真2）では、中央部に側面上半から続く溝状の破碎を認めるが、紐通し孔の輪郭（復元推定径約2.2mm）は半円状に残存する。この孔は、中心からずれて位置するため、紐通し孔は、端面Aの中心からずれた位置から、やや斜方向に端面Bの中心に向かって片面穿孔された

ものと考えられる。

なお、端面 A 側の破砕箇所から内部を観察すると、この紐通し孔とは別の小孔が内壁に認められるが、これは、原報告の「内部で斜方向に別の穿孔がある」という記載に相当するものであろう。また、断定はできないが、側面上半の破砕箇所において、わずかながら穿孔の輪郭と思わしき痕跡（写真 4）も認められることから、破砕を生じさせつつ側面上半から斜方向に孔を穿とうとした状況が想定される。この穿孔は、通常の紐通し孔に対して明らかに変則的な位置関係にあり、貫通しないことから、破砕が生じたために貫通を断念したものとみられ、製作以後、二次的に加えられたものと考えられる。

（3）材質

材質は原報告において不明とされているが、直接手に取り感じられる質感は柔らかい樹脂状を呈する。また、表面には成形時の研磨に伴うものと思われる多数の微細な条痕（写真 5）が認められることや、上述した二次穿孔時の破砕を考慮すると、材質の硬度はそれほど高くないものと考えられる。なお、内部には微小な気泡や植物片と思わしき内包物（写真 6）を包含するが、これらの点から、本資料の材質は、硬度の高い鉱物というよりも、松柏科植物から排出された樹脂が化石化した（斎藤 2008）琥珀の類である可能性が考えられる^{（8）}。

4. 渡来系要素を有する琥珀製切子玉について

日本列島出土の琥珀製切子玉については、池上悟氏が古墳時代における日本列島出土の琥珀製玉類を集成した上で、伊勢地域の井田川茶臼山古墳出土資料に限られるものとしている（池上 1993）。

また、小林友佳氏は三重県の琥珀製棗玉を検討する中で、当該資料を棗玉の一類型として位置づけ、縦断面形状が六角形に近い形状で、外面の面取りが行われているもの（多角形Ⅱ型）については、国内では他に類例がないことを指摘する。また、同氏は、多角形Ⅱ型を含めた伊勢平野の鈴鹿川流域の古墳から出土する琥珀製玉類は舶載品を想定することが最も妥当であると評価している（小林 2023）^{（9）}。本地域において朝鮮半島との関係性を示唆する遺物が散見されることは冒頭ですでに述べたが、それらは、導入期の横穴式石室墳から認められ^{（10）}、金工品と土器という違いがみられるにせよ、大型石室墳から中小石室墳に至る幅広い階層の副葬品として採用されている。縁塚古墳群においても、1 号墳において朝鮮半島南部からの舶載品である瑪瑙製丸玉^{（11）}が出土しており、10 号墳から本資料と共に出土した須恵器平底瓶は、讃岐地域で類例を求めることが難しく、百済土器により近い特徴を有すると評価されている（佐藤 2024）。

なお、本地域の西の愛媛県域は瀬戸内地域の中でも

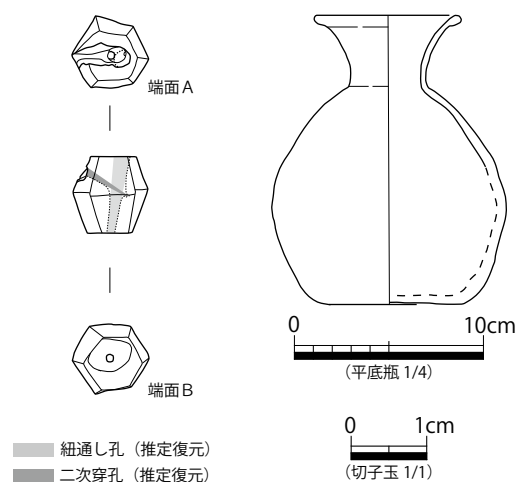


図3 縁塚10号墳出土切子玉・須恵器平底瓶
（切子玉：筆者実測、
平底瓶：中西 1991 掲載図を筆者再トレース）



写真1 側面

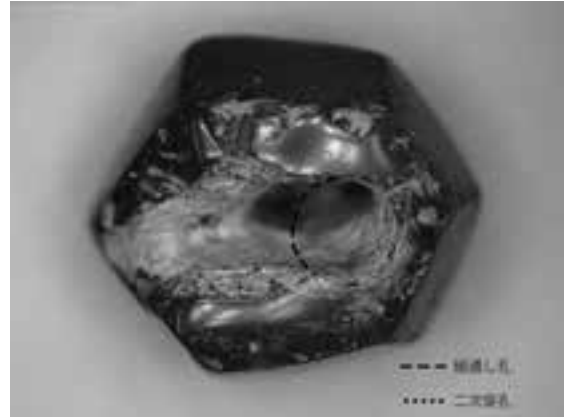


写真2 端面A

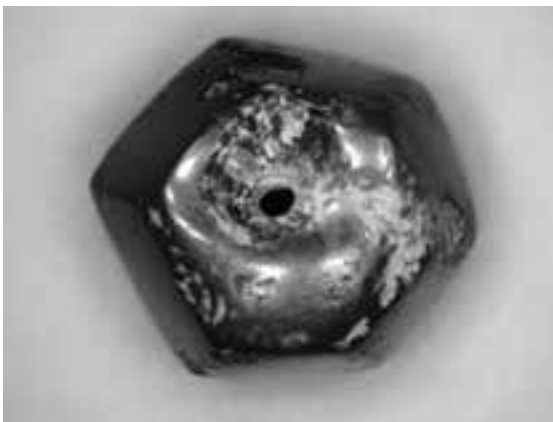


写真3 端面B

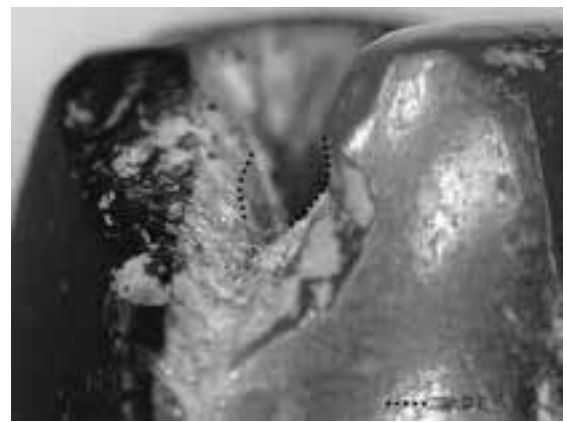


写真4 側面上半穿孔痕跡



写真5 研磨痕

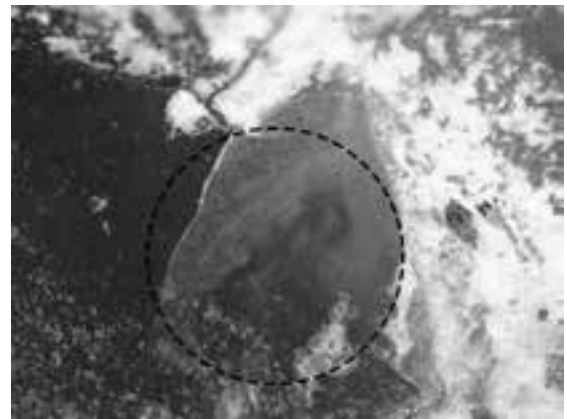


写真6 植物片と思われる内包物

陶質土器や半島系軟質土器をはじめとした渡来系遺物が多く出土しており（高尾ほか 2004）、後期古墳への渡来系遺物の副葬は、本地域の西隣に位置する宇摩平野においても認められる。後期初頭の築造と推定される四ツ手山古墳に副葬された玉類は瑪瑙製の丸玉を含み、東宮山古墳（MT85 型式併行期）⁽¹²⁾ には新羅製の母子大刀をはじめ、新羅系の鐸付鉄鉞、雲母、百済・伽耶系の「広帯二山式冠」等、朝鮮半島南部地域の影響を受けた器物が副葬されている（土屋・清喜 2022）。また、経ヶ岡古

墳（MT85 型式併行期）⁽¹²⁾においても歩揺付金胴冠が出土する等、宇摩平野と本地域を含む燧灘東岸では渡来系遺物が比較的まとまって分布する。中予の松山平野においても、舶載品と評価される獅喙環頭大刀（穴沢・馬目 1979）が播磨塚古墳で、三累環頭大刀が西山古墳と五郎兵衛谷古墳でそれぞれ出土しており⁽¹³⁾、また、溝辺 2 号墳では縁塚 10 号墳出土平底瓶と酷似する陶質土器が出土している。高田貫太氏は 5・6 世紀の瀬戸内地域には、瀬戸内海を介した人・モノ・情報をやり取りするネットワークが広がり、それが朝鮮半島にもつながっていたことを指摘しているが（高田 2021）、これらも、このネットワークを通じてもたらされた可能性が考えられる。

上記の点を考慮すると、本資料は、全国的に事例の少ない琥珀製切子玉（もしくは小林類「多角形Ⅱ型」棗玉）であり、朝鮮半島からの舶載品としての可能性を想定し得る。先述の二次穿孔は、現時点において、その類例が日本列島内において見出し難いことを考慮すると、朝鮮半島内で製作された本資料が同地において、何らかの祭祀等に伴い、紐通しとは異なる意図の下で加えられた可能性が想定でき、井田川茶白山古墳出土資料の紐通し孔が両面穿孔であるのに対し、本資料が日本列島内で広く流通する水晶製切子玉に見られる片面穿孔技法であることを考慮すると、日本列島内で製作された模倣品であることも否定できないものの、例えば朝鮮半島内での製作地の違いを反映しているのかもしれない。ただし、これらは現時点ではあくまで想定であり、具体的には朝鮮半島の類例探索を通じて検証する必要がある。

本資料の流入経路については、日本列島内における出土事例の少なさから現時点では断定できない。しかし、朝鮮半島南部で多量に流通していることから当地域での製作が想定されている瑪瑙製丸玉が古墳時代後期の北部九州周辺で分散的かつ濃密に分布する（大賀 2013）点を鑑みるならば、本資料も縁塚 1 号墳の瑪瑙製丸玉と同様に朝鮮半島から北部九州へと舶載された後、上述した瀬戸内地域のネットワークを介して本地域に流入した状況が想定できる。玉類に限らず他の渡来系遺物の中にも同様の経路で流入したものが含まれている可能性もあろう。なお、土屋隆史氏と清喜裕二氏は、先述の東宮山古墳に朝鮮半島南部地域の影響を受けた副葬品が認められることから、宇摩平野の有力集団が朝鮮半島南部地域との交流において重要な役割を果たしていた可能性を指摘しているが（土屋・清喜 2022）、本地域の渡来系遺物の存在は、隣接する本地域の有力集団もまた同様の側面を有していた可能性を想起させる。

5. おわりに

以上、本資料について、再資料化を通じて琥珀製である可能性を指摘するとともに、朝鮮半島で製作された舶載品である可能性を視野に入れつつ紹介した。その可能性について検証を進めるにあたっては、先述のように朝鮮半島出土資料の集成作業を通じた類例探索とともに、今後機会を設けることができるのであれば、理化学的な分析によって素材の追証や産地を同定する等、より広範な手法を用いた研究が必要となろう。これらの点については稿を改め直して検討したい。

謝辞

本資料の実測及び観察に際し、観音寺市郷土資料館 ふるさと学芸館の職員の皆様にご高配を賜りました。また、本稿の執筆に際しては、佐藤竜馬氏と竹内裕貴氏に貴重なご意見を頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

註

- (1) 大久保徹也氏は、讃岐地域で確認されている 600 基弱の横穴式石室のうち、268 基の規模、特に玄室床面の規模がほぼ判明していることに着目し、玄室床面積の集計を実施している。そして、その集計結果をもとに、全体のほぼ 6 割が 6 m²未満であることを指摘するとともに、多くても上位 2 割を大きく超えない玄室床面積 8 m²以上のものを大型石室、12m²を超えるものを超大型石室と位置付けている（大久保 2018）。なお、本稿では、後述する縁塚 4 号墳および縁塚 10 号墳の横穴式石室の規模についても、大久保氏の位置付けに基づく。
- (2) 本地域における大型ないし超大型横穴式石室の築造は、母神山古墳群中の鐘子塚古墳（TK43 型式併行期 玄室床面積 13.3m²）に端を発する。鐘子塚古墳築造後、程なくして墓域を移し形成された大野原古墳群において、椀貸塚古墳（TK43 型式併行期 玄室床面積 24.6m²）が四国最大の横穴式石室を備えて出現すると、後続する平塚古墳（TK209 型式併行期 玄室床面積 18.3m²）及び角塚古墳（TK217 型式併行期 玄室床面積 10.1m²）も、各々の所属時期では四国最大級の横穴式石室を備えて築造される。
- (3) 町田章氏は、中国や朝鮮半島において鉄地の刀装具に象嵌を施した例が報告されていないため、推測の域を出ないとしつつも、「鉄地金銀象嵌獣面大刀柄頭」の象嵌紋様が、倭製の大刀に見られる竜紋等の象嵌に比して写実的であることから、同資料が伽耶もしくは百済で製作された可能性を指摘している（町田 1991）。また、土屋隆史氏は、鐘子塚古墳出土「銀製冠立飾」を百済の銀花冠飾の影響を受けた技術系譜上に位置づけ、百済から渡来した工人集団によって製作されたものと評価している（土屋 2023）。
- (4) 佐藤竜馬氏は、朝鮮半島を含めた畿内以外の他地域との関わりが想定できる可能性を持つ土器は、地域に定着する系譜上に位置付けられるものと、単発に留まる事例とに分かれることを指摘し、後者の存在から、外部からの単発的な新型式の参入の機会と、それに対する在地土器生産のリアクションの頻度がかなり多かったことを想定している（佐藤 2024）。
- (5) 小寺智津子氏は、朝鮮半島の慶州出土資料に比して斑点が大ぶりかいびつな斑点文タイプの装飾付きガラス玉を日本列島内で製作された模倣品と想定している（小寺 2023）。なお、小寺氏は、「トンボ玉」には重圈文（トンボ目文）以外にも様々な装飾タイプが存在することから、安永周平氏が提唱する「装飾付きガラス玉」という呼称を妥当としており（小寺 2023）、本稿ではその呼称に準じた。
- (6) 原報告において、縁塚 10 号群出土品は、半透明で淡茶色をした、「内部で斜方向に別の穿孔」がある片面穿孔の材質不明切子玉として報告されている（中西 1991）。
- (7) 本資料の色調は 一般財団法人日本色彩研究所監修 2005『新配色カード 129 α』日本色研事業株式会社に基づく。
- (8) 当該資料の透度及び色調が通有の琥珀製玉類に見られる不透明のダークブラウン系統ではなく、半透明のやや明るい色調を呈した「きみのブラウン」色であることを鑑みると、琥珀の半化石段階であるコーパルの可能性がある。
- (9) 小林氏は、伊勢平野の鈴鹿川流域では 1 墳墓ごとの琥珀製玉類の出土点数及びこの多角形Ⅱ型の出土事例が多く、後期の資料が質感・色調ともに他地域とは異なることから、独自の入手形態が存在すること

を想定している。また、同氏は、舶載品を想定することが最も妥当であるとするものの根拠として、井田茶臼山古墳の埋葬施設が北部九州系の技術系譜を引く初期横穴式石室であることが指摘されている点、その対岸に位置する同時期の首長墓である保子里1号墳が琥珀製玉類の出土数・金製垂飾付耳飾や地金銀象嵌振じり環頭太刀を始めとする豊富な副葬品をもつ点、北勢地域における横穴式石室の系譜・導入時期と朝鮮半島南部での琥珀製玉類の勢行期（中期後半～後期前葉）が概ね合致する点を挙げている（小林 2023）。

- (10) 佐藤竜馬氏は、母神山古墳群の千尋神社4号墳から出土した耳杯形土師器を含む日本列島内出土の耳杯形土器9例について、中国の耳杯を起源とした焼物が朝鮮半島を経由して日本に伝わり、その過程で基本形と整形技法を変容させた可能性を指摘している（佐藤 2024）。
- (11) 大賀克彦氏は瑠璃製丸玉が朝鮮半島南部で多量に流通していることから、当該地での製作を想定し、日本列島で出土する資料を舶載品として評価している（大賀 2013）。
- (12) 東宮山古墳及び経ヶ岡古墳の年代的位置付けについては、横田真吾氏の横穴式石室の変遷観（清喜他 2017）に基づく。
- (13) 大谷晃二氏は、国内で出土する獅噛環頭大刀には倭の工房で製作された大刀には見られない特徴（環頭と刀身茎のつながり方や鑄造技術の使用、佩用方法等）が見られることから原則として舶載品であると評価し、三累環頭大刀についても、同様に評価している（大谷 2018）。

参考文献

- 穴沢咏光・馬目順一 1979「獅噛環刀試考」『信濃』31－4
- 大久保徹也 2018「国府以前のことー綾北平野における大型石室墳の築造動向とその評価」『徳島文理大学比較文化研究所年報』第34号 徳島文理大学比較文化研究所年報編集委員会
- 大谷晃二 2018「獅噛環頭大刀と金銀装大刀の製作と流通」『改めて出自を探る！獅噛三累環頭大刀柄頭 シンポジウム資料集』八戸市博物館
- 池上 悟 1993「古墳出土の琥珀玉」『立正大学文学部論叢』第97号 立正大学文学部
- 大賀克彦 2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』9 小学館
- 大賀克彦 2013「玉類」『古墳時代の考古学』7（副葬品の型式と編年）同成社
- 小林友佳 2023「古墳時代における琥珀製玉類の考古学的研究ー三重県の出土例を中心にー」『奈良大学大学院研究年報』第28号 奈良大学大学院
- 小寺智津子 2023『ガラスの来た道ー古代ユーラシアをつなぐ輝きー』吉川弘文館
- 斎藤あや 2008「古墳時代後期における琥珀製玉の再検討ー地域の偏在と大型化ー」『史叢』第78号 日本大学史学会
- 佐藤竜馬 2024「6～7世紀の土器からみた西讃地域」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』XI 香川県埋蔵文化財センター
- 清喜裕二・横田真吾・土屋隆史 2017「妻鳥陵墓参考地墳丘外形調査及び出土品調査報告」『書陵部紀要』第68号 [陵墓篇] 宮内庁書陵部
- 高尾和長・山之内志郎・梅木謙一 2004『東山古墳群Ⅱ - 3次調査・6次調査 -』松山市文化財調査報告書第97集（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 高田貫太 2021『アクセサリーの考古学 倭と古代朝鮮の交渉史』吉川弘文館
- 土屋隆史・清喜裕二 2022「妻鳥陵墓参考地出土品再整理報告 - 総括編 - 」『書陵部紀要』第73号 [陵墓編]

宮内庁書陵部

土屋隆史 2023 「古墳時代における冠の技術系譜」 科学研究費助成事業研究成果報告書（課題番号 21H03874）

中西 昇 1991 『縁塚古墳群Ⅰ－香川県大野原町丸井所在の群集墳の調査－』 大野原町教育委員会

中西 昇 1992 『縁塚古墳群Ⅱ・Ⅲ－香川県大野原町丸井所在の群集墳の調査－』 大野原町教育委員会

町田 章 1991 「鬼面紋象嵌柄頭について」 『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』 VI 瀬戸内海歴史民俗資料館